の

　　　　　（略）

　二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。  
「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってわなくってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手にをなさい。」と先生はにこにこしながらを向かい合わせました。はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶら下げているの手をいそいそと引っ張り出してくってくれました。はもうなんといってこのしさを表せばいいのか分らないで、ただずかしく笑うありませんでした。ジムも気持ちよさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながらに、  
「昨日のはおいしかったの。」と問われました。は顔を真っ赤にして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。  
「そんならまたあげましょうね。」  
　そういって、先生は真っ白なリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、のをもぎ取って、真っ白い左の手の上に粉のふいたのを乗せて、細長い銀色ので真ん中からぷつりと二つに切って、ジムととに下さいました。真っ白い手の平にののが重なって乗っていたその美しさをは今でもはっきりと思い出すことが出来ます。  
　はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。  
　それにしてもの大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とはえないと知りながら、は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでものはに色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

－21－

有島武郎